

---

# 宿命

忍足香輔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宿命

### 【Zコード】

Z5016D

### 【作者名】

忍足香輔

### 【あらすじ】

伝えたい思いをこらえて、ぼくは笑う。大好きな人の隣に、ぼくはいることができないけど・・・。

「あせれ、そんな口じゃなこむ」

かすみさんはぼくの方をむいて笑っている。

「本当にうれしいです。かすみさんの顔、めちゃくちゃ赤くなっていますよ」  
ぼくも笑顔を返す。作り笑いでない、心底の笑顔。

一次会が終わり、多くの人間が二次会会場へ行き、残りが岐路に着いた。一次会会場の店の前で話し込んでいるのは、ぼくとかすみさんだけ。人通りの多いこの通りは立ち止まつて、いるぼくらを避け、進んでいく。間違なくぼくらは浮いた存在となつていた。

かすみさんは自分たちが浮いた存在だと気づいているのだろうか。  
ぼくらを避けていく人は、あからさまに迷惑そうに顔を歪めている  
人もいる。

だがぼくは、不謹慎かもしれないけど、それが嬉しかった。その瞬間だけでも、ぼくはかすみさんの恋人に見えるのではないだろうか。ぼくら二人を意識してくれるのが、たとえ赤の他人であろうと、ぼくは心底喜びを感じた。

かすみさんがぼくの額や耳に手を伸ばす。小さなその手の感触は、柔らかくとも愛おしかった。

「そんなことないですよ」

ぼくはやんわりとその手を避けた。かすみさんに触れてもらいたい。そんな気持ちももちろんある。だが、ぼくはかすみさんに気づかれるわけにはいかない。ぼくは良い後輩でいなければいけない。手を伸ばせば届く位置にいるのに、ぼくはその場所に手を伸ばすわけにはいかない。

「無邪気に笑うかすみさんほくの葛藤に気づいているのだろうか。」  
「ちょっとといいですか」

ぼくらに話しかけてきたのはエプロンをつけた男。無地の味気な

「Hプロンでメニューを持つていいことから离れたあと、一皿で気付いた。

「どおっすか？ 一杯目はサービスしますよ」

いやらしい作り笑顔。その視線がぼくではなくかすみさんに向いている時点で、僕は気がつくべきだったのだ。

かすみさんから笑顔が消えた。かすみさんは信じられないぐらい人見知りなのだ。よく見なければ気づかないほどだが、小刻みに震えている。

「他のものもサービスしますから、少しだけ寄つてつてくださいよ」無理やりに作った笑顔でずかずかと他人の領域に踏み込んでくる。笑つていれば何をしてもいいと勘違いをしている典型だ。ぼくは一歩前に踏み出し、かすみさんを背中に隠した。

「いりません。待ち合わせ中なんで」

一応、作り笑顔をみせ拒絶を示す。作り笑顔はぼくの得意分野。

「じゃあ待ち合わせの人も一緒にどうですか」

そいつの目の色が変わった。けして逃がすまいと舌なめずりでもせんばかりのいやらしい瞳だ。

「じゃあ料理も一品サービスしますよ。ねえどうですか。他にありませんよこんなサービス

「もうお店も決まってるの」

「キャンセルしてくださいよ。絶対うちの店のほうがお得ですから」ふと、背中に重みを感じた。かすみさんの震えた手がぼくの服をつかんでいる。震えたその手が、背中越しにかすみさんの恐怖を伝えてくる。かすみさんの恐怖に比例して、ぼくに使命感のようなものが生まれる。それはじわじわとぼくを支配し、ぼくを奮い立たせてくる。

「ねつねつ行きましょうよ

こともあろうが、そいつはかすみさんの細い腕に手を伸ばした。その時のそいつの瞳、それは獣のように怪しい光を放っているのをぼくは見た。はじめから、こいつの狙いはかすみさんだったのだ。

「行かないっていいてるだろ！」

ぼくはその腕を乱雑に叩き落とし、強く睨みつけた。ぼくはある限りの憎しみを瞳に注いだのではないだろうか。目が強く燃えているのではないかと思つぐらい、ぼくの気持ちは熱くなっていた。

「はやく、行けよ」

ぼくはわざとゆつくりと、区切るよつて言葉を発した。

そいつは目を丸くし、驚きの表情を見せてから「すい」とその場から去つていった。

「えつと、大丈夫ですか」

しばらくしてから、ぼくは振り返りかすみさんに話しかけた。そのときには、かすみさんの表情はゆつたりと和やかなものになつていた。

「うん、ありがとね圭くん。やつぱり頼りになるな」

かすみさんが笑つてくれる。かすみさんがぼくを頼りにしてくれた。かすみさんが今も震えているのは気づいていた。表情は戻つてゐるが、かすみさんの恐怖はまだ尾をひいてゐる。それをぼくに気づかせないよう、ぼくが気にしないようにいつもの表情で笑つてくれる。

それは喜ぶべきかもしれない。かすみさんがぼくのためを思つてくれているのだから。だけど、そのかすみさんの優しさは、ぼくの心を締め付ける。

「いえいえ、お安い御用ですよ」

ぼくはおどけて笑つた。心の痛みを見せないよつて。決してこの思いを気づかれないよつて。

かすみさんがぼくに笑いかけてくれる。それだけでいいじゃないか。かすみさんといつる時だけ、ぼくは作り笑顔でいないですむ。ぼくの本当の笑顔を知つてゐるのは、かすみさんだけ。それはすばらしいことじやないか。かすみさんが気づいていなくとも。

「あつ来たみたいだよ」

かすみさんの声が嬉しそうに弾み、大きく手を振る。ぼくはその

方向に視線を走らせた。

見るまでもない。そこに誰がいるのか、ぼくはわかっている。かすみさんの顔を見れば、誰が来たのかなんて。

決してぼくにむけられることのない笑顔。その人だけに注がれる笑顔。はじけんばかりの、笑顔……。

そこには三人のかすみさんの友達と、もう一人。

かすみさんは早足でその人に向かう。ぼくに背中を向けて。

ぼくが決して敵うことのない相手。ぼくが尊敬している人の下へ。二人が一緒にいるところを見ると、ぼくの心は悲鳴を上げる。内からぼくを叩きつける。それでも、ぼくは笑顔を作り一人を祝福する。思いを隠して、手が届かぬ苦しみを隠して。

かすみさんがぼくを呼んでいる。次の会場に移動するのだろう。だが、その隣にもうぼくはいない。その隣にいるのは、ぼくが尊敬してやまないその人。

ぼくは足を踏み出した。

それでいいじゃないか。かすみさんがぼくを見ていないとも、これからもぼくの心が苦しめられようとも。きっとぼくは耐えられる。かすみさんの一番近くにはいられない。隣にはいられない。でも、一番目にはなれるんじゃないか。隣にはいられなくとも、正面にいることはできるのではないか。隣の人に話すことはできなくとも、正面の人になら話せることがあるのではないか。きっとそういうだろう。

ぼくは、ゆっくりとグループの中に入った。かすみさんはもうぼくを呼んでいない。尊敬するその人だけに笑顔を向けている。誰よりも、誰よりもかすみさんを支えよう。きっとそれがぼくの宿命だから。

(後書き)

これを読んで何か感じていただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5016d/>

---

宿命

2010年10月8日15時06分発行